



受け手は ③

弘前大学医学部四年生の小原ひろみさん(左)は昨年未から十七日間、ボランティアとしてカンボジアのプノンペンへ行ってきた。きっかけは、NHKテレビだった。

情報の送り手は、脚本家の小山内美江子さん。昨年十月、小山内さんが自分の体験した日本国際救授行動委員会(JIRA

「見るだけ」から「利用する」へと変化

C)の活動ぶりを話したのを耳にした。

自分に何ができるか、小原さんは考えた。難民の問題、国際協力……。関心はあった。しかし、実際にこんな行動ができるか、手掛かりを探っていた時期だった。

「これだー」。数日後、電話で、NHKに問い合わせた。それから早かった。十二月、プノンペンに向かう飛行機に乗っていた。

ひと足早く、プノンペン入りしていた小山内さんとも会った。食事をしながら話が弾んだ。

「どうして来たの」と小山内さんにたずねられ、即座に「テレビで小山内さんの話を聞いたんです」と答えた。

この返事は、三十年余りテレビの世界にいる小山内さんを驚かせた。「基本的にテレビは一方通行のメディアと思っていたから」と小山内さん。

もうひとつ、小山内さんの知らないことがある。実は小原さんはテレビを見ていなかった。ラジオでテレビ音声を聞いていたのだ。

小原さんはこう説明する。

「テレビを否定するわけじゃない。でも、だから見辨けるのは、考えたり行動したりすることから逃げていんじゃないかと思う。ドラマは、見るより自分で体験した方がおもしろい」

プノンペンの郊外で、医学生としての知識を生かし、衛生班に加わった。大学で学んでいる超音波やX線検査など、高度な設備とは縁のない医療の現場を知った。

た。ツツガムシ病にかかり、異国で患者としての不安も実感した。「こんないろいろな出あいがあんなって、考えてもみなかった」

た」と、小原さんはいま、しみじみ思っている。

× × ×

AMDA (アジア医師連絡協議会)の病院で、小原さん(左)は、診察の手伝いをした。医師の卵だが、AMDAに入会することにした

